

8/4 説

料理作りで明るさ戻る

なのみ1号室。大分県中津市の「市の木」と同じ名のついた西原ケイ子さん(86)の部屋は、中津市民病院の緩和ケアセンター入り口を入ってすぐのところにある。

隣接する福岡県豊前市で独り暮らしをしてきた西原さん。「夫には若くして先立たれたの。実家の母が亡くなった後は父の看病。14歳までね」。自身は大腸がんで3年半、闘病してきた。今年4月初旬、一般病棟からオープン間もないセンターに移った。

「自分のことをよくわかっていて、しっかり意思表示ができる。気遣いの人でもあり、いつも相手を思いやって、人を傷つけるようなことは言わない」
センターで日々、見守り続ける看護師長の木村美智子さんによる西原さん評だ。



「リレー・フォー・ライブ中津」のスタッフTシャツを着て看護師と語らう西原さん

地域の老人会で会長を務めたリーダータイプ。本や新聞によく目を通し、知識が豊富。しつかり者で世話好きな人柄は、病院スタッフの間で前から知られていた。まず注目されたのは、「病気の高齢者」らしくらぬ装いだった。

スカートに、マスタードのカラータイツを合わせた。華やかな脚に、靴は決まってヒールのあるパンプス。「私はおしゃれが好きだから、ババくさいのはいやな。それに、病院は鬱屈気が暗いからね。派手な格好したらいいわと思って」

女性スタッフと、おしゃれ談議に花を咲かせた。診察の後、手作りのちらしずし弁当を配って、周囲を驚かせたこともある。フリー

「おしいって言われると、私も元気をもらえます」。一般病棟では、ぐったりベッドに横たわっていた西原さんの顔に、みるみる明るさが戻った。

ズドライのみそ汁は、お湯さえ注げばいいように、1人分ずつ紙コップに入れてあった。

「みんな、いつかはん食べてるんやろと思うほど忙しそう。私にできることは何かないかと考えたの」
センターは一般病棟と違って、自宅で過ごすのに近いよう配慮されている。個室で、ミニキッチンもある。「西原さんは、料理しているときはいつも笑顔で、会話も弾みますね」。木村さんは、センターに入ってからの様子をそう話す。

時折、作った料理を医師や看護師にも振る舞った。料理といっても、体が思うように動かないので、座ったままできることをし、友人やスタッフの手を借りて何とかこしらえる。ちらしずしに豚汁、赤飯――。